

## 凡 例

一、本書は広く町民各位に読まれることを期待し、簡明平易な記述を旨とした。但し、貴重な資料については、原文のまま紹介した。また説明上、学術的用語を使用せざるを得なかった場合もあった。

一、第三巻は、近代・現代の二篇とし、それぞれ次のように担当した。

近代篇 盛田 稔・末永 洋一

現代篇 佐々木 崇暉

一、分担執筆に伴う重複記事については出来るだけ意思統一するように心がけたが完全に一致しない分については必ずしも統一することをしなかった。

一、参考文献については、すべて『』を付したが、それらの引用に当っては、短文の場合「」を付して行中に記し、長文の場合には、別行として二わく下げて記することとした。

一、人名はすべて敬称を略したが、引用文に限り、原文のままとした。

一、表記については必ずしも当用漢字音訓表・「送り仮名の付け方」によらなかった。

一、欠字または読解不能の文字は、□□で示した。

一、明らかに誤字と思われるものについては、活字の右がわに（ママ）と記した。

一、数字の用法は左の如く統一した。

一億二三四五万六〇〇〇年

二万三〇〇〇年

一九八二年一月一〇日

但し、列記する場合は次の如くした。

昭一〇・三・三

〳一六・一二・八

〳二〇・八・一五

目次

第八篇 明治・大正……………一

第一章 七戸藩の創設……………盛田 稔……………一

第一節 七戸藩遠祖南部政信家略譜……………一

第二節 七戸藩創設に関する第一説……………文政二年（一八一九）盛岡新田藩として立藩したとする説……………六

第三節 七戸藩創設に関する第二説……………安政六年（一八五九）説……………八

第四節 文政二年説ならびに安政六年説批判……………一六

第五節 七戸藩創設に関する第三説……………文久三年（一八六三）説……………二四

第六節 文久三年説批判……………三〇

第七節 七戸藩創設に関する第四説……………明治二年（一八六九）説……………三三

第八節 結 論……………四三

第二章 明治三年七戸通百姓一揆……………盛田 稔……………五

第一節	概	要	五
第二節	一揆の願条とそれに対する藩の回答		六〇
第三節	一揆に参加した村々		六六
第四節	七戸通百姓一揆関係年表		六九
第五節	一揆の原因		七七
第六節	一揆の結末		八七
第七節	一揆の余波		一〇四
第八節	全国の動向		一〇四
<b>第三章 青森県の成立と七戸村制施行</b>			一〇六
<b>第一節 青森県の成立当時の行政機構</b>			一〇六
一	明治維新と野辺地戦争		一〇六
二	津軽藩による旧南部領支配		一一〇
三	大関藩（北奥県）による旧南部領支配		一二三
四	七戸藩の成立		一二四
五	版籍奉還と藩知事制		一二六
六	七戸藩の政治体制と経済基盤		一二八

七	廢藩置県と青森県の成立	一三六
第二節	地方行政の変遷と七戸村	一三八
一	七戸藩と地方行政	一三六
二	七戸県時代の地方行政と地方行政官	一三九
三	七戸支庁当時の地方行政体制	一三五
四	大小区制時代の七戸村	一四〇
五	「三新法」公布以降の地方自治の推移	一四四
六	七戸村の成立	一四九
第三節	地租改正と七戸地方の動向	一五〇
一	地租改正事業の展開	一五〇
二	青森県における地租改正事業とその矛盾	一五三
三	七戸地方における地租改正と問題点	一五七
四	地租改正とその後	一七三
第四章	明治・大正期における村政・町政の 発展と政治的問題	一七四
第一節	七戸村成立と村政・町政の発展	一七四
第二節	七戸村(町)政を動かした人物	一八九

第三節	明治天皇の東北巡幸と七戸村	一九三
一	天皇巡幸と地方官吏、民衆の対応	一九四
二	明治九年（一八七六）東北巡幸と七戸村	一九九
三	明治一四年東北・北海道巡幸と七戸村	二〇五
第四節	国政・県政上における七戸出身者の活躍	二〇八
第五節	上北郡郡政の展開と郡政の廃止	二二三
一	郡政の発展とその廃止	二二三
二	上北郡政の展開	二三四
三	上北郡郡役所移転問題とその顛末	二二九
（一）	明治一六、二五年の三本木移転要求	二二九
（二）	明治三一年郡役所移転問題と暴動事件	二三五
（三）	郡役所移転問題の背景とその結果	二三九
第六節	士族籍の復権運動	二三三
一	七戸地方における士族の実態	二三三
二	無禄士族による土地払い下げ運動	二三三
三	明治二六、七年における士族復禄運動と七戸士族層の動き	二三四
四	明治三〇年士族復籍について	二三七
五	大正期における士族復禄運動	二三九

第七節 各種行政・政治機関の成立と展開……………二四〇

- 一 七戸における消防体制の成立と発展……………二四〇
- 二 司法機関 ― 八戸治安裁判所出張所の設置……………二四五
- 三 保健・衛生……………二四九
- 四 その他の行政機関……………二五〇
- (一) 警察機構……………二五〇
- (二) 七戸税務署……………二五〇
- (三) 林野行政……………二五〇

第五章 明治・大正年間における七戸の

経済的発展……………末 永 洋 一……………二五一

第一節 商業の発展と大商人層の動向……………二五一

- 一 大商人の町・七戸町……………二五二
- 二 七戸の商人群……………二五三
- (一) 盛田喜平治家の場合(一〇代盛田喜平治、一一代盛田喜平治)……………二五四
- (二) 山本勇吉家の場合(四代山本勇吉)……………二五五
- (三) 米沢与助家の場合(二代、三代米沢与助)……………二五五
- (四) 浜中幾治郎家の場合……………二五五
- (四代浜中幾治郎、七代浜中幾治郎、八代浜中幾治郎)……………二五五

(五) 盛田庄兵衛家の場合（六代盛田庄兵衛、七代盛田庄兵衛）	二五
(六) 山本松三郎家の場合（二代山本儀兵衛、三代山本松五郎）	二五
(七) 川村作兵衛家の場合（一四代川村作兵衛）	二七
(八) 石田善兵衛家の場合	二五
(九) 小原平右衛門家の場合	二五
三 商人⇨地主⇨産業家の事例 — 山本勇吉家の場合 —	二五
四 大正四年時の七戸町商人の実力	二六
第二節 七戸における製造業の発展	二五
一 酒造業の展開	二五
二 その他の製造業	二六
第三節 七戸地方における金融業の発展	二六
一 青森県における銀行業の発展と上北銀行	二六
二 上北銀行の創立と七戸町の地主層	二七
三 第五十九銀行七戸支店	二七
四 階上銀行七戸代理店	二七
五 各種の金融的組織・機関	二七
六 盛田庄兵衛家の金貸業	二七
第四節 七戸水電株式会社 of 創設	二七
第五節 鉄道敷設問題と七戸町 — 南部鉄道敷設運動を中心として —	二六



一	東北本線敷設と七戸村の動き	二八七
二	東北本線の七戸町へ与えた影響	二九〇
三	南部鉄道敷設をめぐる	二九二
	第六節 交通運輸・郵便の発展と商品流通	三〇一
一	郵便・通信の発展	三〇一
二	交通運輸の発展	三〇三
三	商品・物資の流通	三〇四

## 第六章 明治・大正期の七戸町の民衆生活と

社会状況	末永洋一	三〇六
------	------	-----

第一節 明治初年における七戸村の社会状況	三〇六
----------------------	-----

一 『新撰陸奥国誌』における七戸村の概況	三〇七
----------------------	-----

二 『壬申戸籍』の内容と分析	三〇九
----------------	-----

三 『陸奥国上北郡大邑誌 七戸村』の紹介と分析	三四
-------------------------	----

第二節 明治初年における民衆生活上のいくつかの出来事	三八
----------------------------	----

一 宗教問題と七戸の状況	三八
--------------	----

(一) 神仏混合と分離事件(七戸の場合)	三九
----------------------	----

(二) 七戸町におけるキリスト教	三一
------------------	----

二	民衆生活上の出来事と状況	三三
(一)	金の単位について	三四
(二)	入会権の制限と解体	三六
(三)	人民の管理・統制	三八
(四)	太陽暦の採用とその通知	三九
(五)	徴兵制度と軍人志願	三九
	<b>第三節 住居構造と家屋敷地</b>	三四
一	住居構造について	三四
(一)	地主Ⅱ商人層の住居 — 浜中幾治郎家の事例 —	三四
(二)	地主Ⅱ大牧場経営者の住居 — 盛田喜平治家の事例 —	三四
(三)	米内山家の家屋構造 — 七戸地方の官吏の家 —	三六
(四)	一般農家—馬産農家を中心として—の住居構造	三六
二	明治期の屋敷地面積の広大さ	三九
	<b>第四節 出稼・離村の実態</b>	三四
一	明治初年における出稼について	三四
二	『寄留者名簿』の分析より	三四
(一)	明治一—一八年頃の七戸村からの離村状況	四五
(二)	明治二〇年の離村状況	四六
(三)	明治三七年の離村状況	四六

	(四)	明治四二年の離村状況	三三七
	(五)	大正一五年の離村状況	三三七
<b>第五節 民間の各種団体について</b>			
	一	盛田家小作人信用組合	三五〇
	二	工藤家家産団体	三五三
	三	青年団・処女会・在郷軍人会	三五三
	(一)	七戸青年団	三五三
	(二)	七戸処女会	三五四
	(三)	七戸在郷軍人会分会	三五四
	(四)	その他	三五四
<b>第六節 一般民衆―特に農民―の日常生活</b>			
	一	葛巻さとさん(昭和五八年当時七五歳)の生活史	三五五
	二	沢橋兼松さん(明治三二年生)の生活史	三五六
<b>第七章 田畑・牧野の開墾事業の展開と</b>			
<b>七戸町の発展</b>			
	第一節	新渡戸伝の開拓構想	三五九
	第二節	明治初年における土地所有状況	三六一

第三節	七戸藩無禄士族による開墾事業とその苦闘	三七〇
第四節	明治初期における七戸の田畑と所有状況	三七四
第五節	工藤轍郎による開墾事業と工藤農場	三八七
一	荒屋平開墾以前における工藤轍郎の活動	三八八
二	荒屋平開墾事業と轍郎の苦闘	三九〇
三	荒屋平開墾地の拡大と疎水工事	四〇〇
四	工藤農会と小作人対策	四〇六
五	工藤農場の解放	四二二
第六節	中嶋勝次郎による開墾事業	四二二
第七節	開墾事業をめぐる若干の問題	四二八
一	官有地開墾におけるいくつかの問題点	四二八
二	開墾事業をめぐる問題点	四三二
<b>第八章 馬産政策・馬産事業と民衆生活</b> ……………末 永 洋 一……………四三三		
第一節	南部地方馬産事業の沿革	四三三
第二節	国立奥羽種馬牧場の創設と発展	四三四
第三節	軍馬補充部七戸支部の開設と若干の問題	四五〇

第四節	青森県立種馬育成所の創立	四五七
第五節	七戸産馬組合の成立と発展	四六一
第六節	七戸地方における民間経営牧場と企業家的馬産	四七一
一	民間経営牧場の形態とその経営のあり方	四七一
二	工藤轍郎による萩ノ沢牧場の経営	四七五
三	盛田牧場の創設と発展	四八四
四	浜中牧場の創設	四八七
五	東北牧場の創設と特殊性	四八八
第七節	農民的馬産経営に関するいくつかの問題	四九〇
一	農民的馬産経営について	四九〇
二	種牡馬組合とその機能	四九四
三	馬の飼育の方法について	四九九
四	馬飼育の労働と飼料について	五〇三
第八節	馬小作について	五〇五
第九節	馬産と民衆生活	五二〇
第九章	明治以降における商品作物栽培の 発展と農林漁業の展開	五二三

第一節	明治以降の商品作物栽培の発展	五三
一	「明治三年産業興隆令」について	五三
二	七戸地方における商品作物栽培の変遷	五六
第二節	養蚕業の発展と衰退	五二
第三節	りんご栽培の開始とその衰退	五三
第四節	山林所有の状況と林業	五九
第五節	畜産業の発展	五三
一	七戸産牛組合と産牛事業の発展	五三
二	その他の畜産業の発展	五六
第六節	明治期における大麻栽培について	五七
第七節	七戸町における漁業	五八
第八節	七戸地方における士族授産	五〇
第九節	農業技術の改良・発展と農業経営規模の推移	五五
一	馬耕の普及とその結果	五六
二	農業機械・器具の進歩	七〇
三	肥料の改善と普及	七一
四	土地改良の発展と水利事業	七六

	五	農業経営規模の推移と七戸町の状況	五〇
<b>第一〇章</b>		<b>苦悩する農村社会と農民生活</b>	末 永 洋 一
		五三	
第一節		相次ぐ凶作と疲弊する農村社会 —その原因と背景—	五三
第二節		明治期の凶作	五七
一		明治二年の凶作	五七
二		明治一七年凶作と地主制の発展	五八
三		明治三五年凶作と地租減免問題	五九
第三節		大正二年大凶作と七戸町	五九
一		大正二年凶作の一般的状況	五九
二		七戸町における状況と対策	六〇
第四節		明治・大正期における小作慣行の実態	六〇
一		明治一八年の小作慣行調査の紹介	六一
二		大正一年における小作慣行調査	六三
三		大正一〇年小作慣行調査	六七
四		七戸町付近における小作慣行について	六二
第五節		地主制の発展と地主・小作関係	六三
一		地主制発展の一般的経緯と青森県の状況	六三

二	七戸町における地主制	六三六
三	地主による土地買収の事例 — 地主制の形成過程	六三六
(一)	盛田喜平治家における土地集積	六三七
(二)	盛田庄兵衛家の土地集積	六四三
(三)	石田善兵衛家の事例	六四六
(四)	山本勇吉家による土地所有の進展	六四九
(五)	米沢与助家の土地所有規模	六五〇
(六)	七戸町における地主制とその特徴	六五七
第六節	地主制の展開と地主・小作関係	六五九
一	地主・小作関係と小作争議	六五九
二	七戸地方における小作契約の実体	六六九
第九篇	昭和	六七七
	和	六七七
第一章	普選前後の政党政治	六七七
第一節	七戸町勢の後退	六七七
一	郡役所の廃止	六七七
二	軍馬補充部七戸支部の改称	六八〇



第二節	普通選挙前における政党政治	六八〇
一	政党政治の時代	六八一
二	政党政治による政界の混乱	六八一
三	七戸町長改選	六八二
四	上北県議補欠選挙と政争	六八三
第三節	普通選挙の実施	六八六
一	普通選挙の背景	六八六
二	普通選挙による初の県議選	六八六
三	政友会の分裂と七戸	六九〇
四	普選初の総選挙	六九三
第二章	昭和恐慌と凶作	六九七
第一節	金融恐慌の波及	六九七
一	恐慌の勃発	六九七
二	金融恐慌	六九八
三	農産物価格の下落	七〇二
第二節	農村不況の深化とあいつぐ凶作	七〇八
一	昭和六年の冷害	七〇八

二	昭和九、一〇年の冷水害	七三三
第三節	恐慌と救農対策	七三三
一	経済更生運動の展開	七三三
二	地方財政の重圧	七四三
第三章	諸産業の盛衰	七四八
第一節	馬産業の衰退	七四八
一	明治・大正期の馬産	七四八
二	昭和前期における馬産	七四九
三	国立奥羽種馬牧場と軍馬補充部七戸支部	七五三
四	七戸産馬畜産組合	七六二
五	伊佐早勉の功績	七六八
六	民間牧場	七七一
第二節	蚕業の後退	七七七
一	昭和前期における蚕業	七七七
二	青森県における蚕業	七七八
三	七戸町の養蚕	七七九
第三節	工藤農場の解放	七八二

一	戦前の自作農政策	七六二
二	工藤轍郎翁の死と工藤農場	七六三
三	工藤農場の解放	七六六
	<b>第四章 農地改革と地主制の解体</b>	七六七
第一節	七戸の地主経済	七六七
第二節	農地改革の展開	七六八
一	農地改革の発足と第一次農地改革	七六八
二	第二次農地改革	七九一
第三節	七戸町における農地改革	七九五
第四節	農地改革後の農業	八〇五
一	地主経済の崩壊と自作農化の問題点	八〇五
二	農民の疲弊	八〇七
	<b>第五章 戦後民主化のなかの町政</b>	八一一
第一節	民主化政策	八一一
一	概観	八一一
二	政治・行政の民主化	八三三

第二節	新憲法下の町政	八五
一	戦後初の総選挙	八五
二	戦後初の町長選	八六
三	町議会選挙	八三
四	盛田町政と文化都市建設	八五
五	工藤町政と地域開発	八七
第六章	南部縦貫鉄道と地域開発	八三
第一節	戦前における鉄道敷設問題	八三
一	東北本線の敷設問題	八三
二	「南部鉄道」建設問題	八五
三	釜山開発と南部縦貫鉄道	八九
第七章	高度経済成長と七戸	八〇
第一節	高度経済成長と地域経済	八〇
一	高度経済成長	八〇
二	高度成長と七戸経済	八二
三	農業の後退	八五
(一)	農基法農政と農業	八五

(一)	七戸の農業	八六〇
四	零細な商業	八六五
第二節	農村の都市化	八六五
一	市町村合併問題	八六五
二	広域行政と都市化	八七一
(一)	広域生活圏と広域行政	八七一
(二)	広域行政と中部上北広域事業組合	八七三
第三節	農村の工業化	八七九
一	農村地域工業導入促進法の成立とその背景	八七九
二	七戸町工業導入実施計画	八八三
三	工業導入の実態——アンケート調査を中心に	八八八
(一)	サンプル特性	八八八
(二)	導入企業への就業の状態	八八八
(三)	就業以前の状態	八八八
(四)	農業経営・農作業へのかかわり	八八九
(五)	農業経営の変化	八九一
(六)	誘致企業と農家	八九三

